

- 1 教育事業名 「沖縄スリランカプロジェクト～『命と平和を』未来へ～」
- 2 期 日 平成24年9月13日（木）～22日（土） 9泊10日
- 3 場 所 国立沖縄青少年交流の家、沖縄県立糸満青少年の家、沖縄県内各所
- 4 参加人数・内訳 招聘生徒 20名、引率4名、チューター8名、日本人参加者14名
- 5 スタッフ(企画委員)
 チャンドララル氏（委員長 沖縄大学教授）、桜井国俊氏（沖縄大学教授）
 井上章二氏（琉球大学教授）、山里望氏（松島中学校校長）、
 慶田盛元氏（翔南小学校教諭）

6 実施プログラム

月 日	カテゴリー	主な内容	実施場所
9月13日 (木)	基本的な生活習慣 と交流	那覇空港到着後 施設へ移動 オリエンテーション	県立糸満青少年の家
9月14日 (金)	生 活	朝のつどい 交流中学校訪問 授業体験・文化交流会・部活動体験・ ホームステイ（生活習慣・食習慣の理解）	那覇市内交流中学校 ホームステイ受入家庭
9月15日 (土)	平 和	ホームステイ家族との交流 ホームステイ（生活習慣・食習慣の理解）	ホームステイ受入家庭 糸満青少年の家
9月16日 (日)	平 和 生 活	平和学習（歴史を知り命の尊さ大切さを考える） グループ毎ディスカッション（ふりかえり）	那覇市内交流中学校 糸満青少年の家
9月17日 (月)	生 活 環 境	平和学習（歴史を知り命の尊さ大切さを考える） （午後）渡嘉敷島へ	平和祈念資料館 国立沖縄青少年交流の家
9月18日 (火)	生 活 文 化 平 和 キャリア教育	渡嘉敷村長表敬訪問 通学体験、授業体験、文化交流会 村内中学生との交流会（生活環境を知る）通学体験 海洋研修（美しい海を育む環境を知る） 観光産業体験 渡嘉敷中学生との宿泊	集団自決跡・村内戦跡 渡嘉敷中学校 国立沖縄青少年交流の家 村内海岸
9月19日 (水)	環 境	学校へのお礼と挨拶 （午前中）本島へ 普天間・嘉手納基地→美ら海水族館 全体ディスカッション（平和、歴史・文化まとめ）	普天間・嘉手納基地 美ら海水族館 糸満青少年の家
9月20日 (木)		首里城および周辺史跡見学・那覇市街地散策 沖縄県教育長表敬訪問 沖縄スリランカ文化交流の夕べ	那覇市街 糸満青少年の家
9月21日 (金)	平 和 生 活	クロージングセレモニー 東京へ移動	東京宿泊
9月22日 (土)		空港移動 帰国	

7 事業の様子



交流授業（松島中）



文化交流会（松島中）



ホームステイの様子



ホームステイ家族にて



ホームステイ家族との別れ



平和学習（平和祈念公園）



平和授業（渡嘉敷中）



観光業体験（渡嘉敷島）



文化交流会（渡嘉敷島）



普天間基地視察



美ら海水族館見学



お別れパーティーの様子

8 参加者の声

<スリランカ中学生>

- ・日本人は、食事をするとき命についてよく考えていました。買い物の中に私たちに会った人はよく礼をしながら話していて、それは大切なことだと感じました。
- ・サンゴを見るためにいった場所で、スタッフの方が「海のきれいさを守っていきたい」と言って、海を守りながら仕事をしていることが分かりました。
- ・渡嘉敷中との平和の授業がよかったです。そこで私たちはお互いの国の中にある「平和」について知ることができました。

<日本人中学生>

- ・ホームステイを受け入れてよかった。時々言葉の壁にぶつかったときもあったけれど、そんなときには、あきらめずに時間をかけて解決しました。解決できるととてもすごい達成感を感じました。この感覚は日本人同士では味わえないことだなあと感じました。

<日本人チューター>

- ・平和であるためには、まず自分を愛すること。そして次に家族を愛すること。また、このように目の前にいる相手や国境を越える他国の人までも愛すること、思いやることだと学びました。今回学んだこと感じたことを自分の中で感銘を受けて終わるだけでなく、どのようにこの経験を生かしていくか、何年後、何十年後まで命と平和の尊さを伝えられるか、このプロジェクトを経験したからこそできることって数知れず有ると思います。行動に起こすために私は「命と平和」を学び続けたいと感じました。

9 担当者所見

スリランカという日本・沖縄とあまり交流のない国の中学生を招いての国際交流。沖縄とスリランカは、周りを海に囲まれた島国であることや、戦争（内戦）で悲惨な歴史を持っている点、伝統的な芸能が盛んなことなど共通する点が多い地域の交流である。その2つの地域に住む中学生が「命と平和を未来へ」のテーマのもと交流することで、以下のような成果が得られたと考える。

①スリランカ中学生の日本に対する理解を増進すること

環境・平和・歴史・生活の4つのプログラムを経験することで、実感を持ちながら日本に対する理解を増進させた。また、ホームステイや交流授業等、触れ合いを通し、日本・沖縄に対する愛着も増進させることができたと考える。

帰りの空港では、男子までも涙を流し、ホームステイ家族やチューター・スタッフに別れを惜しんでいた。また「将来必ず勉強するために沖縄に戻ってくる」と宣言し帰って行った子が何名もいた。

帰国後も、参加者が中心となり、今回のプロジェクトで学んだ学校内のゴミの分別を行う運動を学校や教育委員会に働きかけて行動に移しているという報告を受けた。また、進学先に日本語教育が有る学校を選んでいる子達も出ていると聞いている。

多くの子が、交流後もメールやフェイスブックを利用しホームステイ家族やチューターとコミュニケーションをとり、さらに交流を深めている。

②日本の青少年の国際的視野を醸成し、次世代リーダーを育成すること

すべてのホームステイ先は「受け入れて良かった。今度はスリランカに行きたい」との感想を持っている。また、「努力すればコミュニケーションがとれた」という子も多い中、「深いコミュニケーションのため、もっと英語を学ばなければならない」と語学習得の必要性も感じ、早速英語のトレーニングに励む子どもたちも出ている。

平和の合同授業を行った渡嘉敷中生徒は「スリランカの人達も『命と平和』について私達と同じ意見を持っていた」「二度と戦争がおこらないように祖父母から戦争の話聞き、次世代に伝える」など、「命と平和」の意味や大切さを再確認していた。

スリランカの子達の明るく人に接する態度や、堂々と楽しそうに自国の歌や踊りを演じる姿に交流した沖縄の生徒達は最初戸惑っていたが、すぐに一緒になってスキンシップをはかったり、手拍子等で楽しんでいた。職員・保護者からは「今の日本に足りない人との接し方や、考え方を学べた」との声が聞かれた。

日本人大学生チューターからは、プロジェクトは軽い気持ちで参加したが、スリランカの子との交流や彼らが日本中学生と交流し成長するのに感動し「人生観が変わった」と感想を述べた。夏休み終了後、ゼミの先生に「夏休み何があったの」といわれるほど生き生きと活動し、将来も国際交流に関わりたいとの目標も持ち始めている。